

□ 安津素彦学長と学生の食事会

拙生の郷里長野県辰野の地に、同県にあつては最初の女子高等教育を展開する信州豊南女子短期大学が開学されたのは、昭和五十八年四月のことであつた。ここに学ぶ学生の中には特筆されねばならぬ者が数多く存在した。同県最北端の地、『古事記』に記す「須羽之海」、更にそれより北の「千野乃郷」からも本学の開講する授業に毎回受講するという極めて勤勉な学生も存在した。これは一偏に当時の本学学長安津素彦先生が、女子教育に並々ならぬ情熱をお持ちになつておられたことが、その背景に存在していたことに因るものである。先生は取り分け学生との会話をつよくのぞまれていて、あらかじめ学生の順番を決めておいて、自らも手弁当を持参して、学生との食事を積極的にすすめられた。但し、この学生との食事会の仔細については、諸種の事情に鑑みて、記録にとどめぬことにしてある。

□□短期大学への道程 バス停の標示

はじめに、長野県初の女子高等教育機関である信州豊南女子短期大学の所在する辰野地域及びその周辺について若干補説しておこう。

当短期大学への道程

今の、新宿から出る中央高速バスが諏訪上社の下(西)、即ち湖東に位置する釜口水門を経て辰野方面へ向かう

Aルート

いま一つの、昔の帝都における飯田橋より鉄道にて諏訪下社へ至り、ここより更に旧中山道の山路伝いに岡谷を経て辰野へ行く

Bルート

この二つのルートのうち、Aルートは、産業廃棄物処理水等により可成り汚染されている。いま一方のBルートは、温泉入浴客の使用水等により、やはり、湖西の汚濁の度合いも従前に比してかなりすすんでいる。

さて、ここで注目しておかねばならぬことがある。それは辰野へ入る手前のバス停に「川岸」とある標示である。太古より周囲の山々から四十数本の河川が流入して膨大な水量を有していた「須羽之海」が一挙に流れた場合、そこに住む人と、その家屋は流され、あるいは破壊されることになる。そこで、こうした災いがおきぬようにとの強い願いを込め小木などを立てて、これを伏し拜むようなことがおこなわれていたのである。

三 天保期の堀氏の城下町

南信の飯田藩 一万七千石

飯田城跡は市街地の東部にあり空堀・塁がのこっている。幕末の藩主親善は老中格として水野忠邦の天保改革に協力した。天保期の藩主親善は、水野忠邦の側近で「堀の八方にらみ」と恐れられた。

天竜川支流の河岸段丘の上にある城址は、開発でかなり破壊されているが、門や石垣などが残っている。飯田藩ではリンゴの自生木・栽培木ともに積極的に生育した。



四 天竜川と音楽芸術文化

心と文化のハーモニー

① 音楽が与えるもの

私と伊那とは縁がありまして、昭和十九年から二十六年まで住んでおりました。なつかしい思い出がいっぱいあります。そんななつかしい土地へ私を呼んでくださったことに、非常に感激しております。私は音楽家ですので、「音楽が与えるもの、音楽が皆さんにどんなふうに影響しているか」そんなことに話をしばってお話しようと思えます。一口に音楽と申しましても、いろいろのものが集まって音楽を形成しています。皆さんが声に出して歌う一本のふし、そこにリズム・スタイル・ハーモニーが作用しあって初めて音楽になるのです。音楽の中で一番大事なものは、ハーモニーなんです。ハーモニーとは「和」です。これはあらゆる点に活用できる言葉ですね。飛行機の精密な機械、皆さんの家族、それらもやっぱりハーモニーでしょう。音楽でいうと和音です。ハーモニーが音楽の中で一番感動を与えるものです。メロディー一本では感動を与えることはできません。どんなきれいなメロディーでもできません。ハーモニーがあって初めて感動を与えることができるんです。ここで、皆さんが一人残らず知っているメロディーを一本借りてきて、話を進めてまいりましょう。たとえば「むすんでひらいて」です。（演奏）これをいかに大きく鳴らしてもつまらないで

しょう。やめてくれと言いたくなります。何がないか、ハーモニーがないからです。ハーモニーにはたくさんの種類があります。最も単純なのがドミソ、二番目はソシレファ、この二種で立つておじぎして座るでしょう。(演奏) これがハーモニーの窓口です。これ以外にもたくさんハーモニーがあつて、それがいろいろ混じりあつて感動を高めるんです。さっきのおじさんのハーモニーだけでも、これで「むすんでひらいて」を包むと、ちよつとした魅力が立ち上つてきますよ。(演奏)

㊦ 大作曲家の持ち味

ここで私は大作曲家のまねをしてみます。今までに神様みたいに偉い大作曲家がたくさん出ました。そういう人たちが、音楽とはこんな上等で素敵なものだということを知らせてくれました。その人たちは皆、持ち味が違います。全部ハーモニーの使い方が違うからです。この人たちが、「むすんでひらいて」を料理したらどうなるでしょう。バッハという人の、「フーガの手法」といって、荒つぱく言うくと鬼ごっこなんです。同じメロディーでおつかけっこしたり、あつちからもこつちからも出てきたりしてハーモニーを作ります。「むすんでひらいて」の旋律をまったくあべこべにしたり、高音を二倍速くしたり、低音を三倍遅くしたり、(演奏) このおつかけっこが八人まで出てきますから、ハーモニーが複雑になつて楽しく、次元の高い芸術にまでなります。特に大天才と思われる人にモーツァルトがいます。彼は音階の達人なんです。音階にはたくさん種類がありますが、あらゆる音階を活用しつくしたのがモーツァルトの音楽なんです。彼のはこうなるかも知れません。(演奏) ベートーベンを抜かずわけにいきません。ベートーベンは頑固なおじさんです。口うる

さくてやかましくて、非常に重苦しく厳格なものが根底にあります。彼の「むすんでひらいて」は荘重で重々しいでしょうね。(演奏) おわかりですか。これは短音階です。ちよつびり悲しく、ちよつびり暗い。さつき
のモーツァルトのは長音階です。これが同じに聞こえたら音痴ですよ。シヨパンへいきましよう。シヨパン
はロマンチストです。女性的で甘く、非常に幻想的です。彼だつたらこの「むすんでひらいて」を土台にし
てどこにそれがあるかわからないくらいに変化を与えて、自分の音楽を作るでしょう。(演奏) 情緒があるで
しょう。このように一つのメロディーがあればどうにでもできるんです。これは魔力ですね。これが作曲家
の個人差です。絢爛豪華な「むすんでひらいて」もできますよ。たとえばリストという人がいました。巨大
なピアノリストです。リストはピアノの達人ですからあらゆる技巧を使いました。だから彼のはそれはもう派
手ですよ。(演奏) おわかりでしょうか。「むすんでひらいて」がどんな風にも化けることを皆さんに知って
いただきたいんです。これがハーモニーのおそるべき力なんです。

② 日本人の音感覚は「嘆き」

さて、私たちは日本人です。日本人には日本人の音感覚があるんです。というのは、私たちの先祖から伝
わっている音の種類はたった五つしかないんです。ドレミソラ。これを陽旋法といいます。私たちのメロ
ディーはこれで何もかもできています。ヨーロッパでは十二の音があるんですよ。十二対五では表現の
あり方がなんとしても敵対できない。五つの音階では皆同じになつちゃうんです。日本にはかっぱれ、そー
らん節、安来節等、たくさんメロディーがありますが、全部この五つでできています。他の音は絶対出て

きません。私たち日本人の音感覚が許さないんです。もう一つの五つの音階があります。ミファラシレ。陰旋法です。長唄、清元、常盤津等の古典とか、浪曲とか、今日、日本列島をおおっているメロディーは全部これです。この音階の好きなものは涙、あきらめ、絶望とか嘆きの言葉なんです。前進的な明朗なものとは拒絶されます。越後獅子、六段、佐渡おけさ等、皆そうです。カラオケなんかは、これ以外には出てこないです。ですから、いかに日本人が嘆きの国民であるかということを感じるわけです。私は五年間フランスにおりましたが、その時初めて私は日本人だということを自覚しました。というのは、外国人は非常にコミカルでユーモラスなものが好きなんです。笑ってばかりいます。そこへいくと、この音感覚がどんなに日本人の心をウェットに、悲しいものに行っているかがわかります。私はここで一つのエピソードを思い出しました。十七、八年前だと思いますが、皇太子殿下からぜひ話をしにいらつしやいとおよびがありました、赤坂の東宮御所へ参りました。五月ごろだと思えます。その時、美智子様がこうおっしゃったんです。「日本の子守歌はどうなんでしょう」と。これは典型的な五つの音階ですから、「有害な子守歌でしょう」と私は言いました。美智子様のはそれを感じていらしたんですね。これを赤ちゃんに与えたらたいへんだと思われたらいいです。センスの鋭い赤ちゃんにこの歌を歌ったのでは、悲しい人になつてちようだいということにつながる、ということをお感じになったのでしょうか。(演奏)「ねんねんころりよ、おころりよ」実に悲しいでしょ。この子守歌、だれが作ったと思いますか。昔、貧しい農民の娘が遠く子守にやられ、故郷を思つて出てきたのがこの言葉、メロディーなんです。徳川三百年の鎖国は全く外国のものを入れず、日本独自のものを発達させ

ました。また、音曲をやるのは社会的地位が低い階級の人々だったんですね。そしてお侍たちは悲しければいい歌だと思っていた。ハーモニーは生まれなかった。これが土台となって私たちの血液にしみこんでいるんです。戦時中に、たくさんの軍歌がありましたね。これも全部五つの音階でしたよ。だから、「勝つて来るぞ」とか、「敵を打ち倒せ」と言っても、この音階が許さらないですよ。何となく悲しいものが伝わってきます。私はこのメロディーがどうしても性に合わないの、軍歌を作りませんでした。でも西洋の音階で作ったのが少しあります。「空の神兵」です。(演奏) 明るいでしょ。これは今でも使われています。私は五つの音階が嫌いです。しかし、「唐人お吉」というオペラを書いた時は、この音階を入れたんです。日本人ですから、向こうの人に書けない曲を書く、それを大いに活用していくことが大切だと思います。日本の伝統的な音階です。やっぱり大事にしたいですね。

③ハーモニーのある音楽で高いよるこびを

西洋ではずっと昔から学者が音響を研究しておりまして、音の組み合わせというものが美しい審美感覚を作ることを知っていました。だから、外国人は非常にハーモナイズしていますね。ハーモニーというのは論理的です。理屈がある。しかしメロディは理屈ではありません。何となく発生した情緒的なものです。だから外国人を理解するためには、私たちがハーモニックな喜び、論理的な見方を知らなければならないと思います。向こうでは酒場のよっぱらいどもが、いつの間にか三重唱を始めていることがあります。彼らは音楽家でも何でもない、町の職人たちですよ。それでもそうなる伝統があるんです。

ヨーロッパではハーモニーだけで音楽ができることを知っていました。メロディーは必要としません。たとえば、ベーターベンの「月光の曲」、全然メロディーはありませんが、上等なお月様を描いているでしょう。（演奏）最後の泡立ちゆれる所もメロディーはありません。（演奏）でも激しい心の動きが表わされていますね。それから皆さんがオカルト映画なんかご覧になると、音楽を良くお聞きになってごらん下さい。非常に濁ったハーモニーで恐ろしさを強調してますよ。死体があつたなんていうと、一発でドキッとするハーモニーがあるんですよ。こういうわけで、ハーモニーの力でいくらでも表現ができるんです。メロディーはほんの少しあればいい。美しいメロディーに似合ったハーモニーをつけていくと、それがすばらしい音楽になるのです。私はハーモニーのあり方というものがどんなに大事かということ、皆さんに知っていただきたいのです。そしてハーモニーのある音楽を愛してくださいるように、本当にお願ひしたいと思います。

〔高木東六先生紹介〕 作曲家・ピアニスト。明治三十七年、鳥取県生まれ。大正十二年、東京音楽学校入学、昭和三年より七年まで渡仏、作曲法を学ぶ。一時伊那市へ疎開、天竜河畔散歩中に「水色のワルツ」が生まれ、大ヒットとなる。「あなたのメロディー」「家族そろって歌合戦」の審査員として活躍。その後オペラの大作「唐人お吉」を作曲。数多くの賞を受賞。

昭和63年11月21日(月)

〔長野県PTA新聞〕

